

都市景観は、建物、街路、樹木、空、大地など、人工物から自然物に至る多種多様な要素の集合体である。これらの要素の間に有機的連関が存在するとき、そこに「都市景観の美的秩序」が生まれ、人びとは深い感動を覚える。伝統的な集落では美的秩序は自然発生的に現象するが、現代都市では景観を構成する要素間の関係が失われ、美的秩序が姿を消しつつある。

本研究の目的は、①都市景観の美的秩序のデザイン原理を探求するとともに、②現代社会において都市景観の美的秩序をデザインする方法を構築することである。具体的には、歴史都市・京都の景観を研究対象として、①景観概念の定式化、②都市景観の美的秩序の多層性の解説を進め、③景観政策の制度設計、④景観創造と景観デザインレビュー、⑤景観まちづくりの実践の経験を踏まえて、⑥都市景観の美的秩序を生成する景観デザインの方法を構築する。

## 1. 景観概念の定式化

人間が景観の中に生き、景観を知覚し、景観を構成していることに目覚めたのは、西欧諸国では近代以降のことである。イギリスの景観論者 G. Cullen は「ひとつの建物は建築だが、二つの建物はタウンスケープである」と述べて、景観の本質が要素間の関係にあることを指摘しており(都市の景観, 鹿島出版会, 1975 年)、ドイツの地理学者 A. von Humboldt は、景観を、植生・土壌・川・湖・動物・人間などの要素が一つの統一ある全体をなして独特の性格を表すものとして捉えている(山野正彦:ドイツ景観論の生成, 古今書院, 1998 年)。景観の概念は、要素間の関係や要素の集合から創発する全体に深く関わっているのである。

## 2. 都市景観の美的秩序の多層性

様々な要素間の関係・総合である景観の美的秩序の本質は多層性にある。この本質に迫る研究には、景観を様々なレイヤーに分解し、それらを重ね合わせる方法を考案した I.A. McHarg の生態学的景観デザイン論 (*Design with Nature*, Doubleday/Natural History Press, 1967)、景観の美的経験を①生物的 (biological) モード、②文化的 (cultural) モード、③個人的 (personal) モードに区別した S.C. Bourassa の景観美学 (*The Aesthetics of Landscape*, Belhaven Press, 1991) などがある。本研究では記号学者 C.S. Peirce の記号現象のカテゴリーに基づいて、①イメージ・身体性に根ざした景観、②環境・行動を写し出す景観、③テキストとしての景観という分類を導入し、そのモデルの洗練を図る。

## 3. 景観デザインのための景観政策の制度設計

21 世紀を迎えた今日、人工物相互の関係や人工物と人間・環境との関係をデザインすることにより、質の高い生

活環境を創造することが求められている。

景観デザインは、そのような新しいデザインの方法を必要とする営みである。都市景観の美的秩序の多層性に基づく景観デザインの実践には、景観政策によるコントロールと景観創造・景観まちづくりの両方が不可欠である。そこで、京都市の景観政策に深くコミットしている立場から、創造的な景観デザインの方法を可能にする制度設計について考察した。

## 4. 設計者による景観創造と景観デザインレビュー

京都市の新景観政策の進化過程で創設に携わった「地域景観づくり協議会」「優良デザイン促進制度」「景観デザインレビュー制度」などは、住民による景観まちづくりや設計者による景観デザインを創造的な営みへと進化させるための制度である。特に優良デザイン促進制度については、発足時から景観アドバイザーを務め、景観のデザイン原理にまで遡って景観創造を促す助言を行うよう務めてきた。こうした景観デザインレビューの記録を分析することにより、景観創造に貢献する建築デザインの可能性を探求した。

その際、建築デザインが都市景観の美的秩序に及ぼす影響を検討するために、VR・AR・MR (仮想・拡張・複合現実)などを導入した新しい景観シミュレーションのツールを開発し、その有効性を検証した。

## 5. 多主体の対話による景観まちづくりの実践

諸要素の関係・総合である都市景観には人びとの価値観やコミュニティのあり方が映し出される。都市景観の美的秩序は幾世代にもわたる多くの主体の対話によって育まれる。景観まちづくりの実践を通してコミュニティづくりを推進する方法を探る必要がある。

京都市内では、修徳学区、三条通、嵐山、大原などの都市エリアの景観まちづくりの実践にコミットし、多くのデザインワークショップを開催してきたが、本研究ではその記録を分析することにより、対話による景観デザインの仕組みを分析した。

## 6. 都市景観の美的秩序を生成する景観デザインの方法

本研究では、都市景観の美的秩序の多層性に基づいて、景観政策 (トップダウン)、景観創造や景観まちづくり (ボトムアップ) といった異なる活動を組み合わせたダイナミックな「景観デザイン」の方法を構築する試みを展開した。美しい景観を有する都市には、住みたい、働きたいと思う多彩な人材が集まり、イノベーションが誘発される可能性が生まれ、創造産業や文化芸術が集積することを思えば、広い意味での景観デザインは、現代都市の重要な課題なのである(門内輝行: 京都の景観政策の進化と建築・景観デザインの展望, 建築ジャーナル, No.1326, pp.22-28, 2022 年 2 月)。